

【選評】
朝日新聞編集委員
藤田直央



多くの証言で再構成された 長期政権の実像

安倍晋三政権の検証は大切だが難しい。安倍氏の強い指導力とその裏腹の強引さで今も評価が分かれる。歴代最長で出来事があまりに多い上に、退任して間もない。しかもその二年後に暗

殺に斃れた。

本格的な検証は外務省による原則三〇年後の記録開示を待つしかないのか。しかしそれも外交分野に限られる……。一記者として悶々としていたと

宿命の子 (上・下)
安倍晋三政権クロニクル
船橋洋一・著

文藝春秋 / 2024年10月 / (上) 2475円、(下) 2585円

ころへ、この本が出た。大先輩に尻を蹴つ飛ばされた思いだ。

安倍政権の検証として群を抜く密度の本書は、ジャーナリスト船橋氏の人脈と取材力の結晶だ。安倍氏へのインタビューは、首相退任翌月の二〇二〇年一〇月から暗殺前月の二二年六月まで計一九回。取材対象は約三〇〇人へのぼり、首相側近や官僚など政局や政策を担う国内のキーパーソンに加え、米中韓など海外にも及ぶ。

船橋氏の誠意は、読者を引き込むべく重要な場面の再現に努める筆致だけでなく、二一ある各章末尾の脚注にもにじむ。さまざまな事実は誰への取材、あるいはどの先行文献によるのかが細かく示される。今後の報道や研究に貢献することだろう。

芥川龍之介の小説『藪の中』のように多面的な安倍政権の実像に迫った動機を、船橋氏は評者のインタビューで

こう語る。

「安倍氏は第一次政権（〇六〜〇七年）の頃から、連合国がA級戦犯を裁いた東京裁判に違和感を示し、第二次政権の当初も引きずっていた。その歴史認識を私は危ういと感じていたが、一五年の戦後七〇年首相談話は日本のバラスト（重し）となり、安倍氏が『大きな政治』に挑む姿勢が見えた。それでも国内では親安倍と反安倍に割れ、冷静な議論ができない状況が続くなかで、安倍政権の政策と戦略、統治を検証しようと考えた」

息詰まる外国要人との攻防

船橋氏がこだわったのが、丹念に集めたキーパーソンらの言葉だ。各章の中見出しはカギカッコ（「」）で括られた言葉で示され、読者をテーマの核心へ導く。

例えば、安倍氏とロシアのプーチン

大統領との首脳会談。二〇一八年のシ

ンガポールでは、安倍氏は北方四島の領土交渉を日ロ二島ずつの領有で決着させる極秘案の骨格を示し、日本領の

二島に米軍基地を置かないよう「トランプ（米大統領）を説得する自信がある」と伝えた。応じたかに見えたプー

チン氏だったが、その高揚感は一九九年にモスクワで会った時には失せていた。同氏は「安倍さんは失うものはゼ

ロ、返してもらっただけだろう」と語り、交渉は膠着状態に陥ったという。

トランプ氏とのやり取りは、来年の大統領復帰後の日米関係を考える上で示唆に富む。一七年に大統領となった

トランプ氏は、対北朝鮮を理由に日本が敵基地攻撃能力（打撃能力）を持つよう安倍氏に再三求めていた。

安倍氏は一八年に来日したマティス米国防長官に、「日本は打撃能力を持つつもりである。ぜひ、協力してほしい

い」と密かに伝えた。岸田政権になって二二年末に、敵基地攻撃能力の導入と米国製巡航ミサイルの購入が決まることになる。

船橋氏はカギカッコを駆使し、戦後日本で長年対立、停滞してきた懸案を前へ進めようとした安倍氏の「大きな政治」を描こうとする。ただ安倍氏のそうした姿勢は、国会論議や説明責任の軽視も生み、長期政権を蝕んでいく。

安倍氏があるスキヤンダルをめぐり国会で重ねてきた答弁が事実と異なることに気づき、退陣につながったことを物語るカギカッコも終盤に現れる。読者はそれぞれに「安倍政権のあの時」を思い出し、疑問への答えを見つけるだろう。

安倍政権の挑戦と功罪に向き合うことで、混迷する世界の今後を探る。ヒントに満ちた本書は「調査報道」（船橋氏）と呼ぶにふさわしい。●